

# 日本人創作讃美歌の研究(一)

— 三輪源造 —

辻 橋 三 郎

日本讃美歌史上に、三輪源造（明治四年生）の名前を見出すのは、明治三六年一月に完成出版された、「世界讃美歌史上特筆さるべき美はしき努力、協力の結晶たる各派共通の『さんびか』」<sup>(1)</sup>に始まる。その後、病没（昭和二十一年）するまで、讃美歌の改訂、編纂に当って、その度毎に、三輪は参画した。彼の功績は、審査編集のみならず、自ら創作讃美歌を提供し、翻訳をも担当したことにもある。現行讃美歌（昭和二十九年二月初版）における、三輪の翻訳讃美歌は七篇の多きを数える。<sup>(2)</sup>ただし、小論では、彼の創作讃美歌のみを考察の対象としているので、それらについては別の機会にゆずり度い。

## (一)

明治三六年一月二六日発行の『さんびか』において、委員として、「序」の末尾に次のような人名が列挙されている。

ろ、石原保太郎

（和田秀豊）

ろ、稲垣 信

(湯谷磋一郎)

い、ジー、オルチン

(メリー、アイ、グリーン)

は、ジエー、シー、カウエン

(デー、エス、スペンサー)

は、エッチ、エッチ、コーツ

(桜井成明)

い、小崎弘道

(湯浅吉郎)

ほ、ビー、エー、デビー

(エム、ビー、マデン)

(メーテル、イー、ヘギン)

に、ダブリュー、ビー、パーシレー

(ヘレン、ユー、パーシレー)

(エー、エー、ペンネット)

に、藤本伝吉

ほ、別所梅之助

ろ、デー・エム、マクネヤ

い、三輪源造

い、組合教会　ろ、日本基督教会　は、メソヂスト教会　に、浸礼教会　ほ、基督教会

(委員の姓名は五十音順に従ひて排列せり。このうち石原保太郎、稲垣信の二氏は、諸事既に整ひ、正に本書を発行せんとする際、日本基督教大会の選挙により、和田秀豊、湯谷磋一郎の二氏に代りしものとす。十二名の委員を以て版權所有者となすの規定なるが故に、代表者の更代<sup>マダ</sup>を附記すること此の如し)

さらに、三輪が、その中でも、重要な役割を果していたことは、同じ「序」の語るところでもあった。

「印刷は三輪源造、ジョージ、オルチン、テー、エム、マクネヤ及び別所梅之助、デー、エス、スペンサー、ジェー、シー、カウエンの監督のもとに、東京印刷株式会社横濱分社及び教文館の二カ所にてなさしめたり。」

「さはれ事業の多くは主査たる別所梅之助、湯谷磋一郎及び書記テー、エム、マクネヤ、三輪源造の四氏の手になりき。而してトニック、ソーファーを附したるはオルチン氏なり。」<sup>(3)</sup>

この明治三十六年版『さんびか』は、大正三年一〇月、第八版を刊行するに際して、若干の修正を施した。三輪は、その時も、一二名の委員中の一人であった。また、『さんびか 第二篇』編纂においても、一二名中の委員の一人として活躍した。この時も、別所、マクネヤ、オルチンとともに、中心的役割を果たしたのであった。ちなみに、この『さんびか 第二篇』は、さきの『さんびか』にもれたものを集めることと、家庭用、日曜学校用の讃美歌として編集されたものである。明治三十九年から作業は始められ、明治四二年一二月に完成した。この段階で、従来の『さんびか』は『さんびか 第一篇』と称されることになった。<sup>(4)</sup>

その後、大正の半ばごろより、教会内に教会音楽、讃美歌研究の機運が勃興し、『さんびか』の徹底的検討、改訂の希望が高まってきた。そこで昭和二年六月ごろからその要望に答えて委員があげられ、再検討の作業が進められた。この時、三輪は、顧問として協力した。完成刊行されたのは、昭和六年一二月であった。<sup>(5)</sup>

このように、三輪が、常に讃美歌編纂の中枢的人物として、大任を委嘱されたのは、彼の文学的才能、日本文学への素養などに、なみなみならぬ信頼がおかれていたことによる。三輪は、明治三十三年同志社神学校本科を卒業、その日本文学への造詣の深さによって、はじめ、松山高女学校、同志社中学（現同志社高校）、のち、同志社女子専門学校（現同志社女子大学）教授として、日本文学を担当した。その点、讃美歌編纂のよき協力者別所梅之助と、全く類似したコースを辿ったことになる。すなわち、別所もまた、東京英和学校（現青山学院神学部）を卒業、のち、青山学院で日本文学を講じていたのである。

## (二)

三輪の創作讃美歌は、全部で九篇、別所梅之助との合作二篇を併せると十一篇となる。三輪の創作讃美歌が、最初に、讃美歌集に収載されたのは、明治三十六年刊の『さんびか』である。すなわち、

- (1) 「第六十九」野やまもくさきも のどけきはるを
- (2) 「第二百四十二」 みくにへゆくと おもひつ、もであつた。

次いで、明治四二年刊の『さんびか 第二篇』である。

- (3) 「第四十八」 このよははなぞの こどもははな
  - (4) 「第五十七」 ひつじはねむれり くさの床とこに
  - (5) 「第百七十四」 あないとひろしや まろき世界せかい
  - (6) 「第百九十二」 われらはあめより ふりししづく
- もちろん、この四篇は、この時が初出である。

次に、昭和六年改訂『讃美歌』には、三篇収載されているが、そのうち、四〇四番一篇のみがこの時点で初出であ

る。

(7) 「四〇四」 きけや明星あかばしの さやかに語るを

他の二つは、明治三六年版『さんびか』所収のもので、すなわち、明治三六年版の、(1)六九番が、昭和六年版では、一〇八番になっており、(2)二四二番が、昭和六年版では、二九八番になっているのである。

さて、昭和一六年四月、『青年讀美歌』が誕生した。この讀美歌は、日本人創作讀美歌が、既刊からの採録をも含めて、六五篇にも及ぶのが特徴であった。三輪の創作は、この中で五篇を数える。この時の初出は二篇である。

(8) 「二四二」 天地あめつちに 神かみの記しせる 詩の巻

(9) 「二四九」 歴史れきしを貫つらぬく 奇くしき攝理せつり

その他の三篇は、既刊讀美歌集に収録されていたものである。すなわち、『青年讀美歌』九〇番は、昭和六年版の四〇四番、『青年』（以下この略称使用）の一三二番は、明治四二年版『さんびか 第二篇』の一七四番、『青年』一三二番は、『第二篇』（以下この略称使用）の五七番の、それぞれ再録であった。

別所梅之助との合作は、明治四二年版『さんびか 第二篇』中の、

(10) 「第五十六」 さかえの主ぬしは うまれましぬ

(11) 「第百六十」 主ぬしなるかみに かはる身みの二篇である。

そして、現行昭和二九年版『讀美歌』には、三輪のそれは、以下の三篇である。

一つは、明治四二年版『第二篇』の五七番、昭和六年版『讀美歌』の一〇八番、昭和一六年版の『青年』の一三二番が、現行の一八九番。

一つは、昭和六年版の四〇四番、昭和一六年の『青年』の九〇番が、現行の四一二番。

一つは、明治四二年版『第二篇』の四八番が現行の四六六番という次第である。

さて、讃美歌について、『キリスト教大事典』には、次のような解説が示されている。

「神への賛美は信仰行為の最初、最後であり、賛美の最も適当な表現は歌唱である。特にプロテスタント諸教派では信徒の直接の信仰告白および礼拝への関与が重要視されており、礼拝での歌唱が欠けてはならぬものと考えられ、そのための歌曲の準備が考えられる。これが賛美歌の存在理由である。」

「賛美歌の文学的音楽的性格、歌いかたについていろいろの考えかたがあるが、賛美歌が会衆の歌であることを出発点にして考えるなら、いろいろの考えかたが歩みより、時代と環境に適した詩や曲がつくれ、うたいかたも方向づけられるであろう。」<sup>(6)</sup>

これを要約すると、讃美歌の第一義は、宗教性(信仰性)と音楽性、そして大衆性ということになる。そこから、文学性(芸術性)については大衆性を基礎にした考え方がなさるべきである。そして、それらが、時代と民族によって性格づけられることを否定しないというのである。とすれば、日本人の創作讃美歌が、日本の特性をもつことも許容されるということになるのだと思う。われわれは、日本人創作讃美歌が(1)宗教性(2)音楽性(3)大衆性(4)文学性(5)風土性(時代と環境とを包含したものとして、この語を使用する)という五つの観点から考察するべきものであることを、以上の解説から諒解できるのである。つまり、この五者の中、前三者が第一義性をもち、後者の文学性、風土性は第二義的性格をもつというところに、讃美歌の本質があると考えるべきであろう。

讃美歌の本質がそうであってみれば、当然、改訂の際に、作者はもちろん、その時の委員など、他人の手によって、改訂の手が加えられても、咎められてはならないということになるのである。

しかし筆者は、この創作讃美歌の考察に当って、音楽性の如何は、考究の能力がなく、また、大衆性については、測定を必要を認めない。したがって、その宗教性、文学性、風土性について検討し、日本人創作讃美歌の究明を進めたい。さて、この目的をもって讃美歌を対象とする場合、その初出と、改訂歌詞の何れに重きをおくべきかという問

題に、先ず、逢着する。筆者は、この際、作者の宗教的エネルギーと、文学的エネルギーを析出することを、研究の究極目標と思惟するところから、初出に重点をおき、改訂歌詞は考究の際に参看すべきものとして取り扱いたい。讃美歌の風土性は、宗教的、文学的エネルギーの両者にかかわりあうものであることから、必然的に、随伴的に、明かにされるであらう。

### (三)

三輪の讃美歌について、別所梅之助は、「三輪君も詩境を得た人である。私は最も散文的であつた。」と、自己と比較してその詩才を賞讃しているが、これは自他をも見事に評価した含蓄のある言葉である。<sup>(7)</sup>海老沢有道氏は、「優雅な作をもつて貢献してゐる。」と、三輪讃美歌の特質を端的に示している。<sup>(8)</sup>由木康氏は、「彼の歌は、優美温雅であることを特徴とする。」と、海老沢氏と同様な評語を用いている。<sup>(9)</sup>笹淵友一氏は、明治三十六年版『さんびか』全体について、「花鳥風月趣味の自然感情に近づき過ぎて信仰詩としての性格を逸脱してゐるものがあり、それは当時教徒の間から批判を受けた。」と、品牒を加えているが、三輪作品など、まさにこの評語に該当しているように思われるけれど、これらについては後述したい。

以上のような批評を受けている三輪作品を以下、一つずつ、検討を試みていくことにする。

(1) 明治三十六年六九番、昭和六年版一〇八番。両者の差違は、二節の第一行だけである。

あめつゆにこそは くさ木もしげれ (明 36)

あめつゆによりて くさ木もしげり (昭 6)

昭和六年は、まだ、三輪存命中であるから、彼自身の手によるものであらう。これは、明らかに前者の方が、次の、

くさきによりてぞ いきものそだつ

と連続して、K音によって韻律リズムの力強さを与えられており、歌唱者の感動を誘い出すものがある。明治三六年版では、「聖子 顕現」という部門に入れてあるが、昭和六年版では、「聖子 降臨」という部門の一つとなっている。明治三六年では、「降臨」と「顕現」とに二分されているが、「降臨」はイエスの誕生それ自体、「顕現」はイエスの誕生に伴う諸現象という風の区別と推定されるが、必ずしも、この二項の讚美歌が、厳密にこの基準で類別されている訳でもない。そうしたところから、昭和六年版以降では、「聖子 降臨」一つに統一したのであるが、この方が妥当である。いわゆる、クリスマスの歌であるが、ルカ伝二章九節の「主の天使きたりて、主の栄光彼等をめぐり照せり」をモチーフとしたことが付記されている。

この第一節は、希望に満たされて予言が成就されるのを待っている冬の夜の静かな世界の描写であるが、あたたかな日本の山野における新春（元旦）の前夜の情景に類似していることを否定できない。

一、野やまもくさきも のどけきはるを

ゆめみてたのしく ねむるふゆの夜

あめつちあまねく のぞみにみちて

みちかひのなるを しづかにまてり

二、あめつゆにこそは くさ木もしげれ

くさきによりてぞ いきものそだつ

ものみなおのれの いのちをすてて

はじめてみわざを とげもこそすれ

この第二節は、旧約の予言の成就が自然現象との対比において述べられてみるとみることができるので、いかにも日本の理解ということができよう。



四、見ずやみつかひの かがやくむれを

きかずやもののね そらにひびくを

ああそのたへなる みうたによりて

みくにとこの世と しらべはあひぬ

六、きよきこよひしも むかしをしのび

あめつちさながら みくにとかはる

すゑの世はるかに おもひをやれば

よろこびあふれて うたとはなりぬ

これらの神の国と現世とに鳴りひびく(四)天使の莊重な歌唱、(六)悠久な天地における歓喜についての、それぞれのしらは、柿本人麿の長歌の重厚なしらべを連想させるに十分なものである。海老沢氏は「クリスマスに際して『あめつちさながらみくにとかはるすゑの世』に遙かに思ひを馳たものである。」と解説し、由木氏は「世界の将来に對する基督者の理想をあらはしたものの<sup>(11)</sup>」という三輪自身の言葉を紹介している。要するに、クリスマスに際して、やがて到来するであろう神の国への思いを綴ったものである。しかしその翹望が日本的風土のなかで五七調の莊重なしらべでうたいあげられているところは、新年を待望するうたを連想させるものがある。クリスマスが新年的理解による発想によつてうたいあげられたところに、前述したような人麿的しらべとなつたのであろう。そうした点、日本人創作讚美歌の面目躍如たるものがあるといえよう。

クリスマススの三輪作品はもう一つある。前掲の(4)、明治四二年版『第二篇』の五七番、昭和一六年版『青年』の一三一番、現行昭和二九年版の一一九番である。初出と『青年』の差違は、初出はおおむね仮名によつて表記されてい

たが、『青年』は、それらが、可能な限り漢字におきかえられていることである。ところが、初出と現行とは、二番はほとんど、三番は一部といった、大幅な改訂が施されているのである。その改訂は、三輪没後であるから、もちろん三輪の手によるものではない。そこで筆者は前述したように初出によって考察を進めたい。

これは、ルカ伝二章一三節、「衆の天軍あらはれ天使と共に神を讃美たり。」という一節がモチーフとなっていることが注記されている。

一、ひつじはねむれり くきの床に

さえゆくふゆの夜 しもも見えつ

はるかにひびくは かぜか水か

否とよみつかひ うたふみうた

二、みくにをてらせる つきかほしか

まひるもおよばぬ 奇しきひかり

すくひとやどれる あいの御子の

聖誕をことほぐ いはひの火か

「ひつじ」「あいの御子」「聖誕」の三語を黙殺すると、縷説の要はない程、日本の除夜の叙景詩といっても差支えない表現である。三番に至って、「あめにはみさかえ かみにあれや／つちにはおだやか ひとにあれと（後略）」と聖句が出てくることで、讃美歌と納得ができるといえよう。そうでありながら、現行讃美歌に採用されていることは、その文学的香気の豊かさにあるのである。しかし、現行讃美歌の斧鉞が、キリスト教的にはなっても、いかにその文学性を損ねているか、転記して参考に資したい。

二、まひるにおとらぬ くしきひかり

み空のあなたに　　てりかがやく。

すくいをもたらず　　神の御子の

うまれしよろこび　　告ぐる星か。

さて、クリスマス讃美歌が、日本人の新年的発想でうたいあげられているといったが、現行版「年末年始」の項に三輪作品があるので、それをここで考えてみたい。それは、前記した(7)昭和六年版四〇四、昭和一六年版『青年』九〇番、現行四一二番の讃美歌である。昭和六年版では、「信徒の生涯 新年」というタイトルの歌群の一つとなっているもので、現行の方は、漢字を仮名に、仮名を漢字におきかえただけの改訂にとどまっている。さて、これは、『旧約聖書』創世記一章三節「神光あれと言たまひければ光ありき」をモチーフにしていると注記されている。創世記冒頭がモチーフになっているだけに、「新年」あるいは「年末年始」に際して天地創造の時を懷う歌という、和歌の詞書風のタイトルを冠したいような歌詞である。

二、地はいと静かに　　空冴えわたりて

この世の生れし　　あしたをしのばす

三、天地けさしも　　あらたに造られ

いはひの御声を　　待つにやあるらし

四、はじめの御業を　　笑みつつ見まし

みかほか朝日の　　にほひぞのどけき

かくて、三輪作品において、クリスマスの歌が、伝統的新年的発想を原点として製作されていて、新年の歌が、天地創造の神信仰に基礎づけられているという事実を確認できるのである。筆者は、以上のクリスマス、新年の讃美歌検討の結果として、三輪のキリスト教信仰の骨格についての仮説を、一応、提出してみよう。すなわち、三輪の内部に

おいて、天地創造の神という神観念は、定着していたが、神の独子イエス・キリストという信仰は、全き定着に及んでいなかったということができるのでないかということである。

(四)

以下、この仮説を、その他の三輪作品を点検することで、可否を精査してみたいと思う。

前掲(3)の、明治四二年版『第二篇』四八番、現行版四六六番、第二編では「聖父 大能慈愛」の部、現行版では「信仰の生活」中の「児童」の部に入っている歌から考えていきたい。

初出と現行版との異同としては、先ず、初出の二節は現行版ではなくなり、初出の三、四節が、現行版では、それぞれ、二、三節となっていることがあげられる。表現の改訂は、初出の四節（現行版の三節）が甚しい。といっても、意味とリズムに大きな変更が与えられているのではないので、特記の要はない。

一、このよははなぞの こどもははな

めぐみのあめつゆ 愛のひかげ

ちちなるみかみの ひびたまひて

さかしめたまふよ いろかきよく

二、こがねの玉して やへやまぶき

にしきおりなす いけのあやめ

かすみにまがふよ 尾上のふち

てふとり来よと いまをさかり

三、くさまにかくれて 笑めるすみれ

みやまのいはかげ かざるつつじ

みそらも仰<sup>うや</sup>がぬ たにのさゆり

とひくるともは さとのこども

四、こがねのうてなに たまのとのに

あめもるふせやに くさのいほに

おひたつにはこそ おなじからぬ

はなはひらくよ ひとのちちと

モチーフとしては、『旧約聖書』イザヤ書五一章三節「エホバの園の中によろこびと歓楽とあり感謝とうたうたふ声とありてきこゆ」と注記されている。先に全歌詞である四節ともに引用したのは三輪作品の中の「エホバの園」が、日本の山野、日本の植物、日本の建物などから成っていることを理解して欲しかったからである。したがって、この日本の風土そのものでしかない「エホバの園」讃歌が、この讃美歌の内容であると要約しても異論は出ないであろう。そのことが、現行版で二節の削除という結果をもたらしたのであらう。要するに、この讃美歌は、初出時同様、「聖父 大能慈悲」のタイトルの部に所属させる方が、現行版のごとく「児童」の部に入れるよりも妥当性があるということになるのである。というのは、天地創造の神の創造した天地の讃美の歌と考えるのが適当であるということである。かくて筆者は、ここにも、三輪の天地創造の神信仰の片鱗をうかがいとることができるのである。

次に(5)、明治四二年版『第二篇』一七四番、昭和一六年『青年』一二二番について考えたい。『第二篇』では「信徒の生涯 服事」の部類に入れてあり、『青年』では「奉仕」というタイトルの一篇となっている。モチーフとしては、『新約聖書』エペソ書二章一〇節「我儕は神の造り給へる者なりすなはち我儕をして善事を行はしめん為に造り給へり。」という注記がある。初出と『青年』との差違は、『青年』が、可能な限り漢字を使用していることである。ここでも、万能の神の天地創造の讃美と、それへの感謝と決意の表明がある。面白いことは、この神によって創造された

天地が、自然科学の新知識の上に表現されているところに、明治三十一年に同志社を卒業した三輪の学識の反映をうかがうことができるといえよう。以下の歌詞の傍線の部分に注意されたい。

一、あないとひろしや まろき世界

そこひも知られぬ おほうなばら

あをぐものぎて たてるたかね

載<sup>の</sup>せたるままにて たえずめぐる

二、いろなきつちより はなさきいで

ながれし水<sup>みづ</sup>また くものぼる

ものみなひまなく かはるせかい

とこよのはじめも いまもあらた

そして、三節は、天地創造の神への讚美とその神への随順とが単的に表明されているのである。

三、わがよきともどち なれもわれも

世界<sup>せかい</sup>も日月<sup>ひつき</sup>も 神<sup>かみ</sup>のみわざ

いざひび御旨<sup>みめづ</sup>を ともになさなん

めぐりてやすまぬ このせかいと

(傍線筆者)

要するに、この讚美歌も天地創造の神信仰のうたと結論し得るのである。

(6)『第二篇』一九二番は、他に採録されていない。モチーフは、『旧約』イザヤ書五十五章一〇節、「天より雨くだり雪おちて地をうるほし物をはえしめ萌をいだしめて播くものに種をあたへ食ふものに糧をあたふ。」との注記がある。

前の歌同様、「信徒の生涯 服事」の部門に入っている。

一、われらはあめより ふりしづく

ちひさくあれども 愛のひかり

やどす珠ぞ

やまよりたにより きたれともよ

めぐみのみわざに 世をうるほすため

いそぎてゆかまし うみにかはに

二、われらはたにより いでしながれ

あさくはあれども めぐみのいろ

うつすかがみ

もりより野べより きたれともよ

めぐみのみわざに よをうるほすため

いそぎてゆかまし うみにかはに

たしかに、一、二節ともに、四行以下はタイトルにふさわしい歌詞である。しかし、前半三行は、創造の神の讃美である。ということ、この讃美歌もまた、天地創造の神信仰の歌というカテゴリーに一括し得るものとしてよからうと思う。

次に、昭和一六年版『青年』初出の一篇について考察する。「感謝」という部門の一四二番の歌である。創造の神の感謝であるが、一節が生命の創造、二節が天地の創造、後記の三節が日本国の創造の讃歌となつているところに、この讃美歌の特徴がある。なかでも第三節には、三輪作品の風土性が看取され、そうした傾向の顕著な日本の讃美歌の

典型的なものということができよう。

三、富士の根は 国の姿と 峠ち

太平洋 民の心と湛へたり

比ひなき御世に 畏き使命

生けるかひあり 青年我ら讀へ奉らん

御霊の御神

この讚美歌は、三輪の詩才をも十分に物語っているものといえよう。「生けるかひあり 青年我ら讀えまつらん 父なる御神」(二節では「道なる御神」)というリフレインの部分を除いた歌詞を掲げておく。万葉の長歌を連想させる、莊重なしらべは、三輪の古典の教養を偲ばせて余りあるものといえよう。

一、山に野に 歩き駈けりて 樂しみ

海山に 泳ぎ潜りて たわむる

燃えさかる生命 生ひたつ此の身

二、天地に 神の記せる 詩の卷

人の世に 神の奏づる 樂の音

読み破る智慧と 聴き知る心

しかし、つまりは、この讚美歌も、三輪の天地創造の神信仰を確認させる一つということができると思う。

(五)

一、みくにへゆくと おもひつつも

したしきものを あとになして



なれしこの世を　たちさるとき

なごりをしまぬ　ひとやはある

(折返) あゝいのりせん

いのりにまさる　なぐさめなし

二、つきぬいのちは　みとむれども

ゆくものよりは　のこるものに

わかれのうれひ　いやふかきを

いかでなげかぬ　ひとやはある

三、うき世のさかえ　もとめずとも

うからやからは　うゑにせまり

われはたやみて　いえぬときは

たれかこころの　おとろへざる

四、こころみつよく　こころよわく

なやみつきせぬ　世にしすめど

いのりによりて　みちからをえ

ちからなき身も　つひにかちなん

これは三輪讃美歌の(2)、明治三六年版の二四二番、昭和六年版の二九八番で、両版ともに、「信徒の生涯 祈禱」の部門に入っている。歌詞は全く同一で、差異といえは、四節四行の最終詞句において仮名が二つだけ漢字におきかえられているだけである。モチーフは『新約』ヤコブ書五章一三節で、「爾曹のうち誰か苦しむ者あるか、あらば祈禱

せよ。である。一節には、愛する人びとを残して死ぬ人の苦しみ、二節では、残された者の苦しみ、三節では、前二行は貧窮による飢餓の苦しみ、後二行は病気の苦しみ、四節に至って、これまでリフレインで強調されてきた祈禱による苦難の克服がうたいあげられているのである。人間の最も深刻な苦悩が列挙され、祈りによる勝利で結ばれている構成、内容は、措辞、行文とともに、充実整備されていて、両版に異同がないのもっともと思われる。ということは、三輪の祈りの体験、祈りの喜びがこの讃美歌を裏づけていて、その生きた感動が全篇に脈動していることを物語っていると考えていい。この祈禱の重視は、キリスト教各派の等しくとる姿勢である。というより、キリスト教信仰の生きた姿そのものであり、明治初年以來、日本人信者も最も忠実に守った信仰生活の実質であった。植村正久、内村鑑三、小崎弘道等、明治のプロテスタントの指導的牧者たちの説教で繰返されたところであったことは当然であった。金森通倫のごとく、政界や財界に一度ならず転身した者ですら、その信仰が甦った時、最も強調したところは祈りの生活であった。<sup>(13)</sup> 筆者は、この三輪作品によって、三輪の信仰生活が祈りに支えられたものであったことを、はっきりと確認することができるのである。

その他、三輪作品として、『青年』の「謝恩会」の部の一四九番をあげることができる。謝恩という東洋的情緒のものだけに、幾つかの表現に、キリスト教の痕跡を見出し得るだけで、どこかの校歌といっても誰も奇異の感を懷かぬ歌詞である。

一、歴史を貫ぬく 奇しき攝理

自然に潜める 上なき智慧の

謎とく端緒 探り得たるも

思へば師の恩 限りも知らず

二、校庭教室 あしたに夕に

互にはげまし かたみに競ひ

たのしみ悲み 常にわかし

一生の友をば いつか忘れん

三、皇国に獻ぐる この身を鍛へ

祖先の精神に 魂をばみがく

学舎師の君 友を守りて

幸はへ給へや 父なる御神

傍線の部分、二ヶ所を除けば、讃美歌というより、三輪の文才を確認させる歌詞の見本といつてよからう。

以上、三輪創作讃美歌の検討によつて、三輪が、天地創造の神信仰に生きており、祈禱によつてその毎日が維持されるという信仰生活に生きていたことを、読みとることができるのである。そして、三輪讃美歌は、日本の風土に材をとるとともに、五七調を主とした伝統的韻律に則するという風土性が、特に顕著な特長であつた。

こうした信仰性、風土性を三輪讃美歌の特色と提示できる有力な根拠として、別所、三輪合作の讃美歌をあげることができる。それらは、明治四二年版『さんびか 第二編』に、二篇あるのである。

一つは、「聖子 降誕」の部の五六番である。

一、さかえの主は うまれましぬ

うまやのうちに

きよきみ子は いねたまへり

まぶねのうへに

たふとしかしこし 聖誕のこの夜

二、みつかひらは きよきうたを

あめにてうたひ

ひつじかひは よろこびつつ

のべにてききぬ

いまなほひびくは かの夜よのしらべ

三、くすしきほし おほぞらより

ゑみつつてらし

ひじりたちは ちぢのたから

ささげまつりぬ

たふとしかしこし すくひのぬしは

一つは、「信徒の生涯 霊の交」の部にある、一六〇番である。

一、主しゅなるかみに かはるる身み

なにかは 乏とちしからん

みどりののに 小川せがわ辺に

わが主 ともなひたまふ

二、死しかけのたに ゆくとても

なにかは おそるべき

主の咎とがと 主のつゑと

つねにわれを なぐさめん

五六番のモチーフは、『新約』ルカ伝一章七八、七九節、すなわち、「その矜恤に頼りて旭の光上より我儕の足を導きて平康なる路に至らんとて臨めり。」であつた。一六〇番のモチーフは、「詩篇」二三篇二節、「いこひの水浜にともなひたまふ」との注記がある。さきに、別所自身の、「三輪君も詩境を得た人であつた。私は最も散文的であつた。」<sup>(14)</sup>という言葉をあげた。筆者は、この別所協力の二つの讃美歌に、三輪作品にない、三つの特性を見出すのである。一つは、非日本的風土性、一つは、聖書密着性、一つは、非伝統的韻律性である。この三輪作品と異質の特質にこそ、別所との合作によるみのであつた。ということとは、別所の創作讃美歌の特徴が、そこに反映しているという訳ではない。合作であればこそ、三輪作品の傾向を超えた、そして、別所作品をも超えた、合作の特色を滲み出し得たのであつた（別所讃美歌における日本的風土性についてなど、その研究は、永藤武氏によってなされつつあるので、御参照いただけたら幸である<sup>(15)</sup>）。すなわち、二人は合作なればこそ、それぞれの好ましからざる特性を否定した讃美歌を作り得たのであつた。

要するに、三輪讃美歌は、その宗教的側面においては、十分に福音的ではなかつたということができよう。そのことから、天地創造の神観念の強調を中心とした宗教性という性格の讃美歌を多く制作する結果となつたのであつた。それは、日本人の伝統的宗教性に容易に受容され得る祈禱などの場合、秀歌を創作せしめることともなつた。そうしたことは、三輪讃美歌に日本的風土性を濃厚ならしめ、クリスマススの歌すら新年的発想に基いたような歌詞のものとしてしまつたのであつた。以上のような特質からみて、三輪讃美歌は日本人創作讃美歌としての性格を端的に象徴したものであるのではないかと思う。

- (3) (2) (1) 海老沢有道『日本の讃美歌』（昭和二二・五 香柏書房）七五ページ。  
 日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌略解 前編』（昭和二九・一二 日本基督教団出版部）二二二ページ。  
 このことについて別所梅之助は次のように記している。

「三十四年に、各派の宣教師諸氏が、銀座会館でしばしば会合した末、百二十五首の歌をえらび、それを訳し直し、作り直すといふ事になった。私は三十四年の三月からお手づだひをした。三輪源造君などは、もし前から関係せられた。いろいろと曲折もあつた末、この事業の為に、松山からオルチン氏の居られる大阪へ移られた三輪君と、京都の湯浅吉郎氏と松山高吉翁とが起草委員というべき格で、逗子に集り、新に稿された。」

マクネヤ 別所梅之助共著 『改訂 讃美歌物語』（昭和八・七 警醒社）『讃美歌小史』一四一ページ。なお、この明らかに別所の筆になると思われる、本書中の「讃美歌小史」中の「日本の讃美歌」の前出は、『日本宗教大講座第十一巻基督教篇』（昭和五・八 東方書院）所収の「讃美歌小史」中の「日本の讃美歌」である。そして、その初出は、『聖書の研究』に、明治四十一年に連載されたものである。「原案は湯谷、三輪の二君と私とでつくる事になった。私どもが用ゐた材料の中、日本語のでは、日本基督教会の委員が編輯しておかれた讃美歌の原稿が、それまでのあらゆる歌集にもまして立派であつた。その原稿は、植村、和田、湯谷の諸氏の手になつたものである。外国語の材料は随分おびただしいものであつた。私ども三人は一週に三日一日おきを集つて、どうにか歌の詞をまとめ、他の三日に三輪氏がマクネヤ氏のもとにいつて、出来たものを楽器にかけて貰つた。そして合はなければ作りかへ、あへば月二回ほどの本会議にかけた。『改訂讃美歌物語』『讃美歌小史』一四三ページ。

- (4) 「さんびか」第二篇も、マクネヤ氏が中心になつて出来た集である。明治三十九年ごろからかかつて、四十二年の十二月に発行した。これは前とはやや違つた方法によつて編輯した。歌なり、譜なりは、おもにマクネヤ氏が選定し他の委員もえらんだけれど――それを三輪君だの、私だのが翻訳するなり、譜にふさは（原文脱落）しい歌をよむなりした。三輪君は京都にいつてをられたので、原案は銘々につくつた。湯谷君も数度翻訳せられた。他の友人にも助力をうけた。今度のは先輩のに基づかないのだしするから、原作は、三輪君のにも、私のにも、公けに名を署した。三輪君のが五首、私のが十一首ある。最後の修正は、やはり夏、軽井沢でした。明治四十一年であつたろう。稲垣信、小崎弘道両先輩とともに、

- (5) かなり、長い間、私どもは『つるや』の別荘にゐた。『改訂讃美歌物語』一四四、一四五ページ。
- 「昭和の編輯には、マクネヤ氏のやうな中心人物がなかつた。それから明治のをりには、譜の事で議論するのは、宣教師だけのやうであつたが、今度はさうでなかつた。それだけ日本人の方の音楽が進んだのであらう。今度は明るい歌をといふ要求もあつた。むづかしい詞はやめてくれと、度度いはれた。そんな次第で出来た昭和版にも、多少の新面目はあらう。しかし今日になつて見ると、明治三十六年版は一つの標準を示したかの如き相もある。昭和版は主として由木康、木岡英三郎二氏の勞になる。」「改訂讃美歌物語」「讃美歌小史」一四八ページ。
- (6) 辻 莊一『キリスト教大事典』（昭和三八・六、教文館）四五八ページ。
- (7) 『改訂讃美歌物語』中の「讃美歌小史」マクネヤ、別所梅之助共著。一四三ページ。
- (8) 海老沢有道著『日本の讃美歌』（昭和二二・五、香柏書房）一三三ページ。
- (9) 由木 康著『讃美歌の歴史』（昭和二二・五、木水社）一九九ページ。
- (10) 海老沢有道著『日本の讃美歌』（昭和二二・五、香柏書房）一三三ページ。
- (11) 由木 康著『讃美歌の歴史』（昭和二二・五、木水社）一九九ページ。
- (12) 『新約聖書』ルカによる福音書 二章一四節。
- (13) 『信仰のすすめ』（大正五・八、警醒社書店）一二二—一四六ページ。
- (14) マクネヤ、別所梅之助共著『改訂讃美歌物語』（昭和八・七、警醒社）一四三ページ。
- (15) 「キリスト教受容に現れた日本人の主体意識——讃美歌の翻訳創作・編纂にみる——」  
『国学院大学日本文化研究所紀要第三十二輯』（昭和四八・九）

# A Study of Hymns Written by Japanese as Peperesented by Genzo Miwa (1)

Saburo Tsujihashi

The hymns written by Genzo Miwa can hardly be said to embody the Gospel in its full religious concept. Miwa wrote a number of hymns whose theology is characteristically centered around the concept of God the Creator. This added a peculiar Japanese quality to his hymns, so as to make even his Christmas hymns reminiscent of expressions based on the concept of the Japanese New Year. Thus, I believe that Miwa's hymns represent quite well the characteristics of the hymns composed by Japanese writers.